

【シンポジウム『『矛盾』を生きる?』—古代ギリシャ、日本、インド— 提題】

「矛盾」なき教えを求めて ～ 聖典と聖者のインド ～

友成 有紀

1. はじめに：ヴァーラーナシーの青年

卑近な話で恐縮だが、三月のヴァーラーナシー（ベナレス）での出来事である。初めてのインド訪問も日程半ば、同地で幾人かの人々に会って旅行の最大の目的も達成し、さて明日は少しゆっくり観光でもしようかと思案していたところで少し熱が出た。日本ではようやく日差しが暖かくなってこよやかという時期、インドは真夏のような暑さを迎える。ガンジス川沿いの沐浴場（ガート）の内、もっとも南のアッシー・ガートのほど近くに宿があったが、同じフロアの旅行者による真っ昼間のどんちゃん騒ぎに辟易して、日陰をノロノロと歩きながら逃げるように宿を離れた。途中の雑貨屋でよく冷えたペットボトルの水を買い、一番風の通りが良さそうなガートの石段の隅に腰掛ける。真昼の暑さの中では煩わしいボートの客引きや、河に投げ込む供物の花や写真を売りに来る子ども、頼みもしないのにベラベラとカソーバ（火葬場）の説明を始めては駄賃をせびる男どももいない。背中側に少し離れた街の遠い雑踏と寺院から漏れる音楽を聞きながら、あつという間にぬるくなってしまったボトルを額に当ててボンヤリと濁った水を眺めていると、大学生然とした青年が声をかけてきた。

自分はどこぞの田舎の出身で、今はこの有名な大学（バナーラス・ヒンドゥー・ユニヴァーシティ）に通っている——今散歩をしていたら、日本人学生らしき人間が具合悪そうに座り込んでいるのを見つけて心配になり、つい声をかけてしまったのだという。気弱になっていたのと、

青年の人懐っこい笑顔、そして親切心とに心を打たれ、つつい熱が出ていて辛いのだと弱音を吐いてしまった。すると、彼は熱があるのならすぐに薬を飲んだほうがいい、近くに薬局があるから、解熱剤を出してもらおうという。あまり気は進まなかったけれど無下にするのも忍びない。案内を頼むことにすると、彼はサイクルリキシャー自転車に曳かれる「人」(力車)をつかまえて、その薬局まで連れて行ってくれた。小綺麗な店には店主の男がひとり。熱が出ているということを伝えると、真新しい包装のパッケージを取り出して、その場で開封し、ブリスターを二錠分切り取って、二回に分けて飲みと手渡された。代金が心配だったが、五〇円もしないほどを請求されただけでホッとした。ホッとしたところで店を出て、青年に感謝の言葉を告げると、青年はニコニコしながら言った。

「やあ、どういたしまして。ところで、偶然この近くにもう一つ、知り合いのやっている土産物屋がある。そこへ行けばタダで茶を出してもらえるから、行ってしばらく休もうじゃないか。」¹

熱に浮かされていたとはいえ、油断もいいところであった。先程までの感謝の気持ちも一瞬で吹き飛び、熱のだるさと真夏の暑さが一気に襲い掛かってきてフラフラした。ひどい顔をしていたはずだ。その顔のまま、本当に熱が辛いので、申し訳ないがもう宿に帰って寝ようと思う。薬のことはどうも本当にありがとう。君の友達の店に行けなくて悪いけど、心から感謝しているよ——そう言い捨てて、宿の方向に一目散に歩き始めた。それなりの往来の中だったのが幸いした。彼が一言二言怒鳴ったのが聞こえたが、それっきりこちらを追いかけようともせず、そのうち完全に見えなくなった。

2. 真実こそが勝利する……？

筆者がこの時感じたのは、この青年の親切的な振る舞いと、彼の本当の目的の間にある大きな隔たりであった。幻滅し、怒りを覚えてしまったのだが、この「大きな隔たり」というのが、本稿で筆者が目撃したい「矛

盾」である。ある人のことばや行いと、同じ人の別のことばや行いと
の趣旨が一致しないとき、その人は「矛盾している」といわれる。「人を
騙す」というのは、この種の言行不一致的、自己矛盾的な意味での「矛
盾」の攻撃的発露に他ならない。親切心の裏側に、利己心や悪意が潜ん
でいるのである。無自覚の場合や、本音と建前レベルの場合など、世間
的には許容される程度のものももちろんあるだろう。しかし、真意や事
情がどうあったにせよ、この種の「矛盾」はあまり気持ちのいいもので
はなく、自己矛盾に気づきながらもこれを隠蔽し、正すことのない人物
は非難の対象とならざるをえない。

インドに縁の深いフレーズとして「真実こそが勝利する (*satyam eva jayate*)」という文句に聞き覚えがある人もおられるかもしれない。インド独立の父 M. K. ガーンディーを例に出すまでもなく、インドは「真実 (*satya*)」を愛する国である。この三単語からなるサンスクリットのフレーズは現代インドのモットーとなり、紀元前の名君アショーカ王が作らせたとされる獅子柱頭の図案とともにインド政府が発行するさまざまな書類に付されるエンブレムの一部を構成している (図 1)。

この句の出典は『ムンダカ・ウパニシャッド』(紀元前5世紀頃)であるといわれている。これはウパニシャッド文献の中でも比較的古層に属する文献であるが、この文章には次のような続きがある。



सत्यमेव जयते

図 1: インド政府発行
e-Tourist Visa の印章

真実こそが勝利する。虚偽はこれに如かず。
真実なる道によって神々の道行きは広がっている。
それによって聖仙たちが願望を成就して踏み入るところ。
「それ (=ブラフマン)」は真実の最高の宝である。²

数々のウパニシャッド文献に註釈を施したヴェ
ーダーンタ 学派の大学匠シャンカラ (8世紀) も「真実」を信奉し、

こよなく愛した人物である。このウパニシャッドの文言に対して、彼は次のような註釈を加えている――

周知のように、世間においては真実を言う者が虚偽を言う者を斥けるのであり、その逆はない。これゆえに、真実が強力な目的達成手段であることが確定する。³

シャンカラによれば、世間 (*loka*) では必ず嘘つきは排斥されるという。しかし、このこととは裏腹に、世間においては虚偽が真実に勝つということが少なからずあるように思える。詐欺事件、冤罪事件、その他もろもろは枚挙に暇がない。逆説的ではあるが、虚偽が多いからこそ真実の価値は高いのだともいえる。

3. トラと旅人の話

ここで、インドの文学作品『ヒトーパーシャ』から「トラと旅人」の物語を紹介したい。ヴァーラーナシーの青年から逃げたあと、ふと思い出した物語である。

『ヒトーパーシャ (有益な教示)』という名の寓話集は、西暦500年ころには成立していたとされる教訓的寓話集『パンチャタントラ』を始めとしたいくつかの作品に取材して、ナーラーヤナという西暦800~900年頃のベンガルの人が、同地のダヴァラチャンドラ王のパトロネージのもとで纏めたものと伝えられている。勉学に身の入らないとある王国の王子たちに、ヴィシュヌシャルマンという老賢哲が、動物に擬した主人公が登場する種々の寓話を通じて処世の術 (*nīti*) を伝授するという筋書きで、広くインドの内外に読み継がれてきたものである。「トラと旅人」の話は、この作品の第一章で最初に語られる印象深い挿話である⁴。

ある旅人が、旅の途中で年老いたトラに出遭った。トラは川で沐浴をしながら、道行く人々に「この黄金の腕輪をもっていつてくれない

か」と声をかけていた。旅人は、トラの危険性を疑いながらも、腕輪を得られる思いがけない好機と思い、トラと問答を始める。トラは自身がかつて多くを殺めてきた因果で血族が死に絶えてしまい、あるバラモンに教えられ、徳を積むために布施をしているのだと説明し、既に老いて無力であり、欲もなく、純粋に腕輪を必要としていそうな人物に与えたいだけなのだと訴える。有名な聖典の文句を適度に引用しながら自らを信用するよう力説するトラに、旅人はとうとう心を許してしまう。腕輪を受け取るため、トラのいる川へ近づいていった旅人であったが、沼に嵌って身動きが取れなくなってしまう。助けようと言ってゆっくりと近づいてくるトラを目にして、旅人は「肉食獣に心を許してしまった」という自らの最大の失敗に気づき後悔する。とうとうトラに捉えられた彼は、そのまま殺されて、食べられてしまった。

旅人はどうしてトラに欺かれてしまったのか——旅人の「欲 (*lobha*)」こそがその失敗の原因であるとして、『ヒトーパデーシャ』は強欲を咎める。物欲は一種の認知バイアスを旅人にかけてしまったのであろう。彼は正常な判断力を失ってしまう。金の腕輪を見せ、不殺生 (*ahimsā*) や無欲 (*alobha*) を強調し、聖典を誦んじて、本来起こり得ない布施行為をあたかも理に適ったものであるかのように見せるといったトラの術中にまんまとはまってしまったのである。死の間際になってようやく、「肉食動物である」という「トラの本性」とその言動との「矛盾」に思いが至らなかった過ちに気付くが、既に手遅れである。これは、欲が目くらんでこの「矛盾」に思いが至らなかった旅人自身の非である。人は、ものごとの「本性 (*svabhāva*)」を正しく理解し、欺かれることがないように常に思考を巡らせなければならない。

興味深いことに、トラの姿はまるで伝統ヒンドゥー教社会において身分制度の最上位に属するバラモンのように描かれる。沐浴をし、聖なる草を手にしてしている。そのうえ、実際に有名な聖典『バガヴァッド・ギーター』のほか、何かしらの法典から持ってきたものと思いきフレーズも唱えてみせる。非常に手の込んだ詐欺のような話である。おそらくは「知り合いの店」からいくらかの紹介料を貰おうと考えている程度のヴァー

ラーナスイーの青年とは比べ物にならない、完全な殺意（食欲）を押し隠しての偽装工作と書いていいだろう。

このトラのように本性上の悪人が「聖者」然とし、「聖典」に拠って道理（*dharma*）を説きながら襲い掛かってくるという恐るべき事態に万が一遭遇してしまった時、我々は一体何を頼みにこの身を護ればよいのだろうか。旅人が後悔の念とともに痛感しているように、究極的には、「聖者然としている」とか、「聖典を学んでいる」ということは、ある人物が信用できるかどうかの直接の根拠ではない。しかし、欲望に目がくらんだという点はさておき、「聖者や聖典は信頼できるものである」という暗黙の了解がなければ、そして、その暗黙の了解が悪用されなければ、このような失敗自体が生じないはずである。聖者や聖典は、では、信頼に値しうるのだろうか。

4. 誤った認識と正しい認識

旅人が命を落とした原因は、彼が「誤った認識」を抱いてしまったからだと言うこともできる。これに対するものは「正しい認識」である。インド思想の歴史において、ヒンドゥー教徒、仏教徒、ジャイナ教徒、唯物論者、およそ全ての哲学学派がその根本思想を整備しつつあった頃からさまざまに議論を闘わせてきたテーマの一つが「正しい認識」あるいは「正しい認識手段」とはいかなるものか、というものである。このふたつはいずれも「プラマーナ (*pramāṇa*)」という語で表されることがあり、文脈に拠っていずれかの意味で理解される。プラマーナはまた、世俗的には「権威」の意味でもよく用いられる。

仏教徒ダルモッタラ（9世紀）が述べる「正しい認識」の有名な定義は極めて示唆的である。

整合的でないことがない認識が「正しい認識」である。世間でも、先に示した事物を獲得させることで人は「整合的である」といわれる。それと同様に、認識もまた、先に示した事物を獲得させること

で「整合的である」といわれる。

『ニヤーヤ・ビンドウ・ティーカー』

つまり、蜃気楼を見て「水だ！」と思うような認識は「正しい認識」ではない。「金の腕輪が手に入る！」というような認識も、結果からみれば不整合であり、「正しい認識」ではないことがわかる。それはちょうど、世間において詐欺師や嘘つきが「権威（プラマーナ）」と見做されないのと同じことである。

5. プラマーナとは

「解脱 (*mokṣa*)・涅槃 (*nirvāṇa*)」を頂点に、インドにおいては「徳 (*dharma*)」「財産 (*artha*)」「愛欲 (*kāma*)」を人間の人生の目的に数える。いずれの目的も「プラマーナ」に基づかなければ達成することは出来ない⁵。「プラマーナ」を目的達成の手段（の一部）と考えることについては、大抵の学派が見解の一致を見る。その一方、このプラマーナとしてどのようなものが認められるかについては種々別々に異論がある。

たとえば、「直接知覚 (*pratyakṣa*)」「推論 (*anumāna*)」「ことば (*śabda*)」などはよくこの手の議論の俎上にあがる。「正しい認識手段」が対象とする事物はさまざまであるが、現前の物を対象とする「直接知覚」の信頼性は一般に高いものと考えられている⁶。他方、こういった自己の直接知覚の領域から対象が離れれば離れるほど、「推論」や「ことば」といったプラマーナの必要性が問われるようになる。

「推論」とされるものには細かく分けると二種類があつて、これを分類する仏教徒のことばを借りれば「自分のための推論」という、何かを判断するときに働く認識のプロセス（推理）をいうものと、「他人のための推論」という、他人を納得させる・論破するときに使用される論証にあたるものがある。

前者の、認識プロセスとしての「推論」に関してよく引き合いに出さ

れる事例は「あの山に火あり。煙のゆえに。およそ煙のあるところには必ず火あり。かまどのごとし」というものである。

しばしばインドの論理学は帰納法的だと言われる。この推論も「山」や「煙」や「かまど」に関する「直接知覚」の経験に依拠して成立しているのであって、その信頼性を担保するのはあくまでも「直接知覚」である⁷。

では純粹に「直接知覚」の完全に及ばない事柄、たとえば「ヴェーダ祭式の果報として天界に生まれること」を人に正しく認識させるものは一体何であろうか。

6. 「聖典＝ことば」というプラマーナ

「ヴェーダ祭式の果報として天界に生まれること」を主張するヒンドゥー教徒、特に古代以来の祭式中心主義を標榜し続けた聖典解釈（ミーマンサー）学派は、ヴェーダ聖典の「ことば」をその真実性を保証する「プラマーナ」と考える。ヒンドゥー教徒の諸学派はほとんどがこの「ことば」を独立した「正しい認識手段」の一種と捉える。

ここに、ひとつの疑問が生じる。「ことば」を「正しい認識手段」のひとつと認めるとして、その信頼性を保証するものはなにか、というものである。トラの例を出すまでもなく、我々は経験的に「ことば」が常に信頼できるものでないことを知っている。とりわけヴェーダ聖典に関しては、その權威性を巡って仏教徒などが激しい論難を行い、積極的にそれを否定していたことが知られている。

仏教徒がヴェーダ聖典の權威性を攻撃する際に用いた喩えの一つに、いわゆる「目の見えない人の行列 (*andha-paramparā*)」がある。誰も真に合理的な仕方それが正しいと証明できないにもかかわらず、バラモンたちは延々とヴェーダ聖典を伝承し続けているというのである⁸。さらに別の典型的な批判は、ヴェーダ聖典の中に「祭式における家畜の犠牲 (*paśu-bandha*)」が要求される一方で、黄金律としての「不殺生」も同時に（別所で）説かれていることが「自己矛盾」にあたるのではな

いかというものである。仏教徒からすれば、聖者たるべきバラモンたちというのは自らの生活の為に虚偽を真実であるかのごとく行う詐欺師か、全く矛盾した思考を持ち、いわゆる統合失調の状態にあるような、正常な判断能力を失ってしまった人々ということになる。

7. 宇宙のことば・神のことば・仏のことば

ヴェーダ聖典の信頼性の問題に対して、聖典解釈学派と、後代ヒンドゥー教の一神教的宗派と融合していった論理学派がそれぞれ主張したのは、ヴェーダ聖典が「人為によるものではなく、無始以来存在するので無謬である」——ヴェーダはいわば「宇宙のことば」である——とする見解と、「主宰神が世界創造のときに作ったから無謬である」——つまり、ヴェーダは「神のことば」である——とする見解であった。

しかし、いずれの形であれ、聖典の無謬性を「人間が作ったのでない (*apauruṣeya*) = 人間を超越している」という性質のみに由来するものと捉えることには問題があり、これは再度聖典否定論者からの攻撃に遭わずにはいられなかった。否定論者は、「そもそも超感覚的な事柄を凡人は理解できるのか」と問う。「超感覚的な存在 (聖典あるいは神) が超感覚的な事柄について述べている」というならば、聞き手も超感覚的な何かしらの能力を持っているべきである。感覚とそれに基づく経験に強く縛られたこの世界の住人であるところの我々がその内容を正しく理解できるといえるだろうか。

バラモンの側でもっとも強烈にヴェーダの権威性を主張したのは聖典解釈学派の雄、クマーリラ・バッタ (7世紀頃) であろう。彼は同時にもっとも苛烈な仏教批判者でもあった。彼はヴェーダの絶対性を論証する傍ら、並行的に仏教聖典そのもの、その内容、それを説いたとされるゴータマ・ブッダその人を非難する。

その内容に関して言えば、仏教徒の説く理想的な涅槃の境地は既にヴェーダ文献の一部をなすウパニシャッドなどで語られているものであるからオリジナリティはなく、彼らがヴェーダを否定するのにやっきにな

るのは、自分たちの考えが親たるヴェーダを超えられないのを自覚してしまい、不良になった息子たちのようなものだからだという¹⁰。

クマーリラはまた、仏教聖典、つまり仏のことばとされるテキスト自体も批判する。それは、仏教聖典が聖なる言語サンスクリットで著されていないからである。彼は、ことばの意味 (*artha*) に真実と虚偽があるように、語形 (*śabda*) にも真実と虚偽があると主張する。「不妄語」という戒律を堂々とたてておきながら、言行が矛盾しているではないか、という訳である¹¹。

またもちろん、仏教における最高位の聖者、如来たるゴータマ・ブッダその人を批判することも忘れない。クマーリラからすれば、「布施を受取ること」「教えを説くこと」という行為は、そもそもヴェーダ聖典によってバラモン階級のみに特権的に許可されたものである。それをクシャトリヤの身分に生まれながら行ってしまったゴータマ・ブッダは信頼の置けない人物である¹²。

このように、インドにおいては仏教徒とヒンドゥー教徒の激しい批判の応酬が千年以上に及んで続けられたのであるが、ごくローカルな例を除いては平行線を辿り、ついぞ決着を見ることがなかった。やがてムスリムがインドを席卷する時代が来ると、とくに仏教寺院は徐々に破壊されていき、その長い伝統は唐突な幕引きを迎えることとなった。

8. 討論と矛盾

ところで、インドにおける宗教論争は、現実世界だけでなく書物の世界でもほとんど常に討論の形をとっている。インドにおける討論の伝統は古い¹³——紀元前6世紀頃に属する古層のウパニシャッド文献には、当時すでに様々な人々が種々のテーマで議論を闘わせていたことが窺い知られる。このような討論の起源は、祭のときに賞品・賞金をかけて行われた公の討論会であったといわれている。『ブリハダーラニヤカ・ウパニシャッド』には、かの有名なウパニシャッドの哲人ヤーージュニヤヴァルキヤが、ジャナカ王の御前で次々と対論者を論破し、沈黙させ、賞

品である牛を総ざらいしていく様が描かれている。

この討論に敗北した場合どうになってしまうのか。真剣な討論の場であれば、自ら敗けを認めるか、聴衆（審判）に敗けを認められた者は、討論相手の弟子の身分に落ちねばならなかったり、果ては命を失うこともあったという。絶命するほどの事態は特殊事例であったにせよ、討論術としての論理学こそは、バラモンであれ、仏教徒であれ、あるいはその他のいずれのグループに属する者であれ、必ず身につけるべき重要な教養であったことは疑いない。

論理学派の根本教典『ニヤーヤ・スートラ』は、このような討論術の観点から、「敗北する立場（*nigraha-sthāna*）」とはどういうものかを詳細に分類して22項目を列挙している。ヤージュニャヴァルキヤの哀れな対論者たちのように、答えに窮して「沈黙してしまう」のは「対論者の批判を認める」ことであり、「敗北する立場」のひとつである。

このように、いかに自分は敗北せず、相手を敗北させるかに力点が置かれた論理学理論の発達が古くから見られたインドでは、相手に矛盾を指摘されたとき、敗北を認められてしまう前にその場で即座にそれを解消することが必須であった。

哲学文献においても討論の性格は色濃く、自説を滔々と述べ続けるモノログ形式の作品は少なく、常に敵対論者が現れては、何らかの主張なり批判をぶつけてくるというヴァーチャルな討論の様相を示す。論敵には名指しで実在の学者やグループが挙げられるケースと、想定反論のケースが共に見られるが、いずれにせよ、強力な論敵・論難を論破すればするほど、自説の説得力が増すことになると考えられている。

論破という点をもっとも重視したのはナーガールジュナ（150年頃）に始まる仏教徒の中観派だろう。彼らは「帰謬論法（*prasaṅga*）」と呼ばれる方法論を駆使してヒンドゥー教徒や、同じ仏教徒の説一切有部などと激しい論争を繰り広げた。彼らは自らの主張は持たず、ひたすら相手の見解を相手取り、相手がやがて自己矛盾を起すように差し向けることを得意とした。自己の主張を持たないでひたすら論難を浴びせられることをバラモン側はおおいに嫌ったが、ヴェーダ聖典というなんとしても護持しなければならない伝統を有するバラモンと、それを批判する

ことを中心戦略に据えることが出来た仏教徒の間での討論の方策に非対称性が見られたとしても、これは無理もないことであつたと言えよう。

9. 「推論」の限界

ヴェーダ聖典を遵守し、深く伝統に帰順する文法学者バルトリハリ（5世紀頃）は主著『ヴァーキヤパディーヤ』において、推論について次のような見解を述べている。

ある事柄が、推理能力に長じたものたちによって、努力して推理されたとしても、別のより優れた専門家たちによって、全く別様に立証されることがある。

……

天的な眼によって、超感覚的な諸物、不可知の諸物を見る〔ことができる〕者たちの言葉は、論理的判断によって、否定されることはない。

人は、自分がその眼で現に見たことを余り疑うことはない。それと同様に、そのような〔信頼のできる〕人から得た知識を余り疑うことはない。現にこの眼で見たというレベルで成立しているそのような知識を、どうして他人が〔論理的判断などによって〕否定することができようか。

……

盲人がでこぼこ道を手探りで走ればきっと倒れるであろうことは容易に想像される。それと同じように、推理を第一の頼りにする人も、きっと倒れるであろうことは全く容易に理解できる。

『ヴァーキヤパディーヤ』 1. 34-42¹⁴

これは「推論」という知識手段の力そのものを否定しているのではなくて、むしろそれを運用する人の営みの本質と、それゆえの限界を指摘していると理解すべきである。単に個々人が限定された知性に依拠して

お互いの優劣を競うだけの手段にすぎない推論などと、ヴェーダ聖典の絶対的に真実な言葉とは正しさの次元が違う。ある場合にヴェーダ聖典に「矛盾」が指摘されたとしても、それは屁理屈でしかなく、理屈には理屈でひっくり返され、あるいはまた覆され、悪くすれば堂々巡りをすることになるだけである。真実は常にヴェーダ聖典と、それに通じた「天的な眼」をもつとされる大聖仙（maharṣi）の著した一群の聖典（スムリティと呼ばれる）のうちにあるのであり、ここにはまた、天的な眼を持つとされる聖仙たちへの深い恭順の意が見て取れる。

権威主義と見る向きもあるかもしれないが、思い返して頂きたいのは、そもそも「プラマーナ」という言葉が世間的には「権威」を意味して使われているということである。インドにおいては、「正しい認識（手段）」は何かという議論と「権威」とはどのようなものかという議論が不可分のものとして取り扱われてきた歴史がある。とくに、「解脱」や「涅槃」といった超感覚的・超経験的な圧倒的に未知の事柄について、一体どのような「正しい認識（手段）＝権威」がその存在を保証してくれるのか、が常に論争の火種だったのである。

これ以上は信仰の次元に問題がシフトしていくように思われる。インドにおいてはやがて「信愛（バクティ）運動」と呼ばれる、唯一神への絶対的帰依・尊崇・愛情などを特徴とした信仰の在り方を追求する時代がやってくる。そのような宗教形態の特徴をよく表している詩節をヒンドゥー教シヴァ派の讃歌（stotra）からひとつ引用したい。

三ヴェーダ（を始めとする諸学）、サーンキヤ学、ヨーガ学、獣主派の見解、ヴィシュヌ教と、出発点が様々にあれば、「これは最高」、「あれは有益」といって、嗜好の様々ななるによって、ひたすらなるか紆余曲折なるかの多様な道をゆけども、人々の唯一なる帰趨は汝（＝神）なり。水のやがて大海に赴けるが如し。¹⁵

『シヴァ・マヒムナ・ストートラ』

近世の大ヴェーダーンタ学匠マドゥスーダナ・サラスヴァティー（16～17世紀）が著した『プラスターナ・ベーダ（種々なる道）』は、彼の

宗教融和的な態度を述べていると謂われるが、このテキストは上記の詩節に対する彼の註釈とかなりの部分が一致する。自説と矛盾するような対論者の立場も、矛盾はそのままに、すべてはより大きな枠組みの一部を成しているに過ぎないと捉える傾向は、時代が下るほどにヒンドゥー教の中にますます顕著になってゆく。

10. 「矛盾」なき教えを求めて

インドの長い歴史の中で、「プラマーナ」が深く考察された背景に宗教論争の側面を否定することはできない。一方でやはり「聖典」や「聖者」を必要とする人々の心には先に述べたような人生の目的を達成したいという欲求が根強くあったことも確かである。旅人は、「財産」を得んがために行動し、まやかしの「聖者」性、まやかしの「聖典」のことばを根拠に誤った推理して、トラの本性ととはかけ離れた性質を誤ってトラに帰してしまい、ために命を落とすこととなったのである。

ところで、インドには昔から唯物論者（チャールヴァーカ）と呼ばれる人々がいて、彼らも学派のようなものを形成していた。彼らは靈魂の存在を認めないだけでなく、「直接知覚」以外の正しい認識手段を認めず、あらゆる聖典を認めないし、その人生の目的も「財産」や「愛欲」といった、きわめて俗世的な物以外は重視しないし、恐れるものは世俗の権威による懲罰のみである。無神論的で、どことなく、現代的な人々である。ヒンドゥー教の学者からは、最低の連中と見下され、「ならず者学者」などと貶される彼らであるが、「聖典」や「聖者」に騙されるよりは、そのような生き方のほうがリスクは少ないのかもしれない。

しかし本質的なところで、我々はトラと出遭った旅人と同じである。我々は、自分の直接知覚や、過去の経験の及ばない事柄に対して、何かを獲得したいという動機をししばしば抱く。その時、「聖典」や「聖者」に頼らずにその願望を達成することは可能だろうか。「聖典」を自分がよく頼りそうな情報ソースに、「聖者」をこれだったら信用できそうだという人物像に置き換えて欲しい。もしも、悪意を持った何者かが「聖

典」の文句を引用し、「聖者」然とした態度で巧妙に狡猾にずっと忍び寄ってきたら、果たして我々は、相手の「本性」とその言動の「矛盾」を見事察知して、襲いかからんとする危機を無事回避することができるのだろうか。未知の物に対する欲望を断つことが出来ない限り、そのような危険はいつも身近にあると考えなければならないように思われる。

注

- (1) 「知り合い（友達）が店をやっている」「タダで茶が飲める」「今日は減多にないセールの日らしい」等などはあからさまな詐欺師の口上で、この種のことをばかけてくる人物について行っても百パーセント得をすることはしない。
- (2) *Works of Śaṅkarācārya in Original Sanskrit. Vol. 1: Ten Principal Upaniṣads with Śāṅkarabhāṣya*. Motilal Banarsidass, 1964. p.168 :*satyam eva jayati nāṁṭarṁ satyena panthā vitato devayānaḥ/ yenākramantyṛṣayo hy āptakāmā yatra tat satyasya paramaṁ nidhānam//* “jayate”ではなく、“jayati”となっているのはインド古典語の持つパラスマイパダとアートマネーパダという二種類の人称語尾の違いであり、厳密に言えばその意味が異なる場合があるのだが本稿の内容には関わらないのでこの点は扱わない。
- (3) *ibid. satyam eva satyavān eṣa jayati nāṁṭarṁ nāṁṭavādīty arthaḥ. nahi satyāṅṭayoḥ kevalayoḥ puruṣānāśritayoḥ jayaḥ parājayo vā sambhavatī/ prasiddham loke satyavādināṅṭavādy abhibhūyate na viparyayaḥ, ataḥ siddham satyasya balavatsādhanatvam/*（下線部を訳出した。）
- (4) 金倉円照・北川秀則訳『ヒトパデーシャ 処世の教え』（岩波文庫, 1968年）pp. 20-24参照。
- (5) インドにおいて「真理の探求」が人間の目的とされていないことは注目しておくべきだろう。ここで言われている「徳（dharma）」は真理としてのダルマというよりは、昇天や解脱をもたらす原因としてのダルマであり、宗教的な徳のことである。
- (6) 直接知覚の領域において起こりうる「矛盾」的事態として、たとえば「ひとつのはずの月がふたつに見える」などが考慮される。これはしかし感覚器官の瑕疵に由来するものであり、直接知覚自体の信頼性を損ねるものではないとされ、

この種の知覚はプラマーナとしての直接知覚からは排除されている。

- (7) この点はインドにおいても唯物論者などが指摘しており、彼らは「推論」の「正しい認識手段」としての独立性を認めない。
- (8) 吉水清孝『クマーリラによる「宗教としての仏教」批判』(龍谷大学インド研究センター, 2015年) p. 17。
- (9) この点に関しては、「殺生」をテーマにした昨年度シンポジウムについての加藤隆宏氏による「古代インドにおける殺生」を参照されたい。
- (10) 吉水 (2015) pp. 25-26。
- (11) 針貝邦生 (1975) 「Sādhuśabda をめぐって」『印度学仏教学研究』23-2 pp. 1045-1037参照。
- (12) 吉水 (2015) pp. 24-25。
- (13) インド論理学全般については、桂紹隆『インド人の論理学』(中公新書, 1998年) が入手しやすく大変わかりやすい。本節においても裨益されるところきわめて大であった。インドの論理学の伝統はきわめて古い。古典語であるサンスクリットにおいて、「矛盾 (contradiction)」に相当する論理学的な概念を表示する語を挙げるとすれば、「ヴィローダ (virodha)」がそれにあたる。古典的文法の手順に従ってこの語を分析すると、動詞接頭辞 *vi* に先行された動詞語根 *rudh* に、男性抽象名詞などを作る接尾辞 *ghañ (=a)* が付されて *virodha* という語形は成立する。動詞語根 *rudh* の意味は「さまたげる」であり、ここに「反対、敵対」などを意味する *vi* が付されることによって、全体として「対立する」という意味の動詞となる。インド論理学ではこの「対立」こそが論理学上の「矛盾」に相当する意味を持つといってよい。本稿ではこの論理学上の矛盾概念——「推論」の一部を構成する重要な概念——を扱わなかったが、興味のある方は是非ご一読いただきたい。
- (14) 赤松明彦訳『古代インドの言語哲学 I』(東洋文庫, 1998年) pp. 89-97。
- (15) Swami Prahlad Giri (ed.) 1985. *Mahimna-stotra of Gandharvaraj Pushpadantacharya with "Madhusudani" Commentary of Madhusudhanacharya*. Haridas Sanskrit Granthamala 68. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office. P.8: *trayī sām̐khyāṁ yogaḥ paśupati-matāṁ vaiṣṇavam iti prabhinne prasthāne param idam adaḥ pathyam iti ca/ rucīnām vaicityrād*

シンポジウム『『矛盾』を生きる?』（野津・吉原・友成）

*ṛjukuṭilanānāpathajuṣāṁ nṛṇām eko gamyas tvam asi payasām
arṇava iti//*